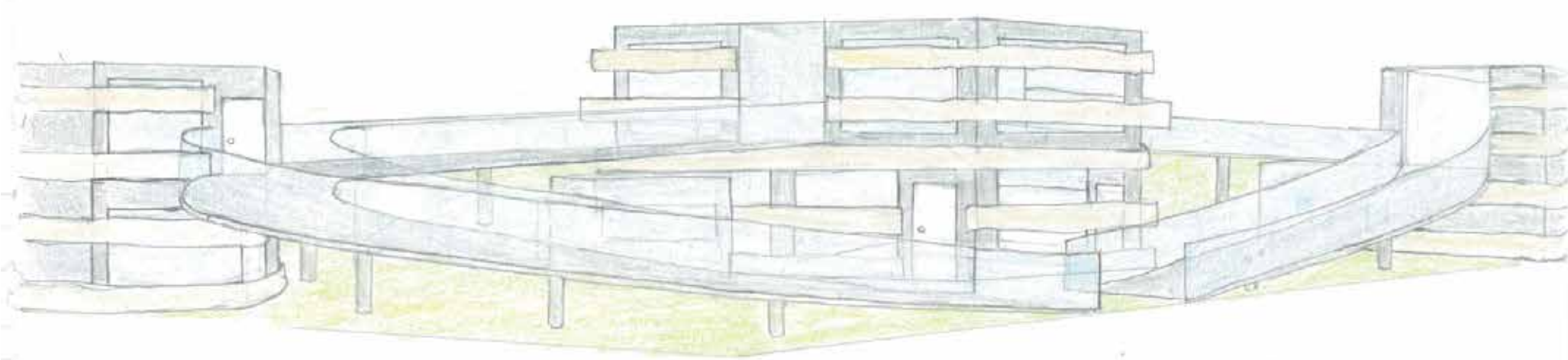


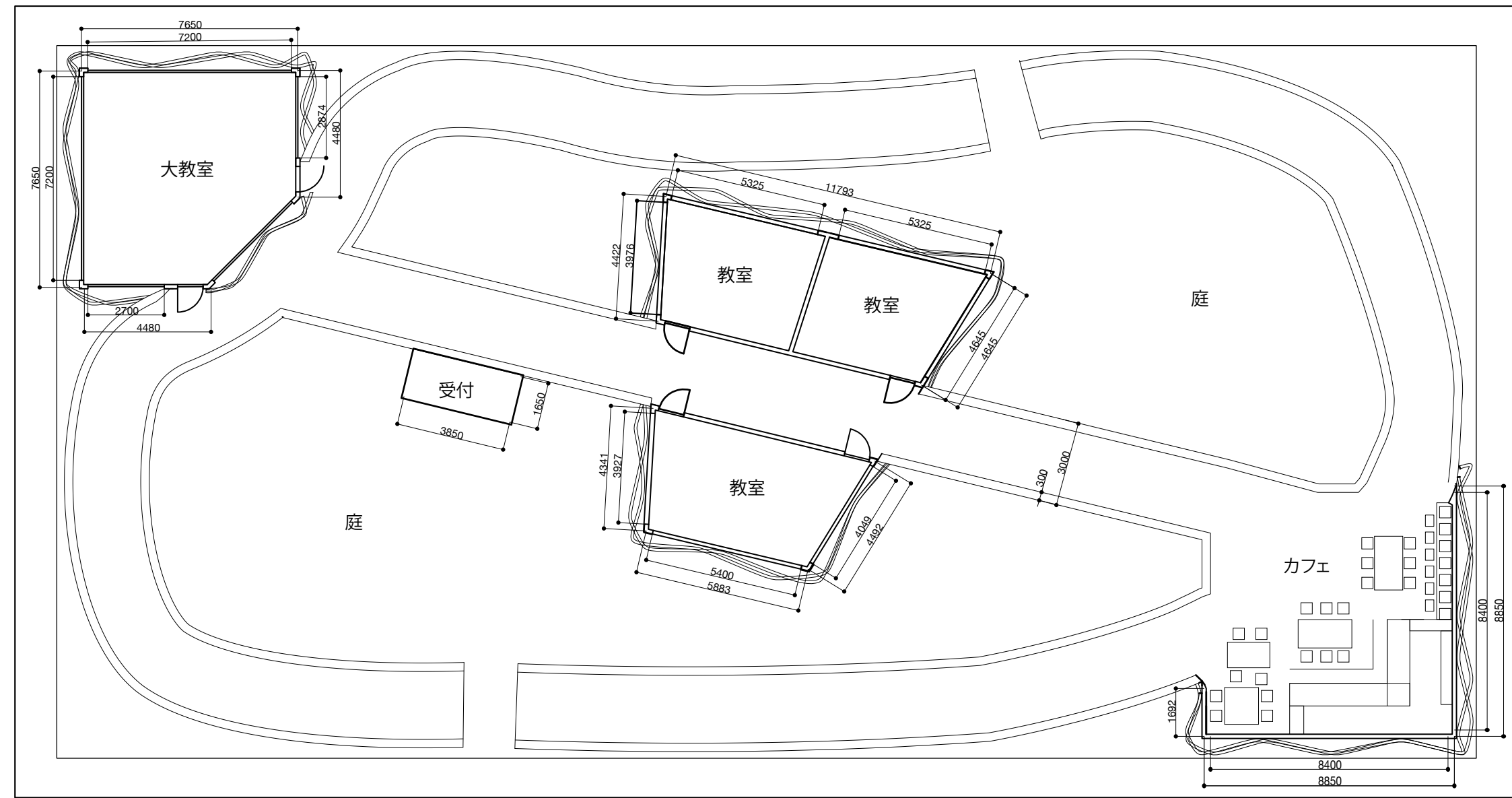
# 自分を見つける回廊

## 新たな趣味のコミュニティー

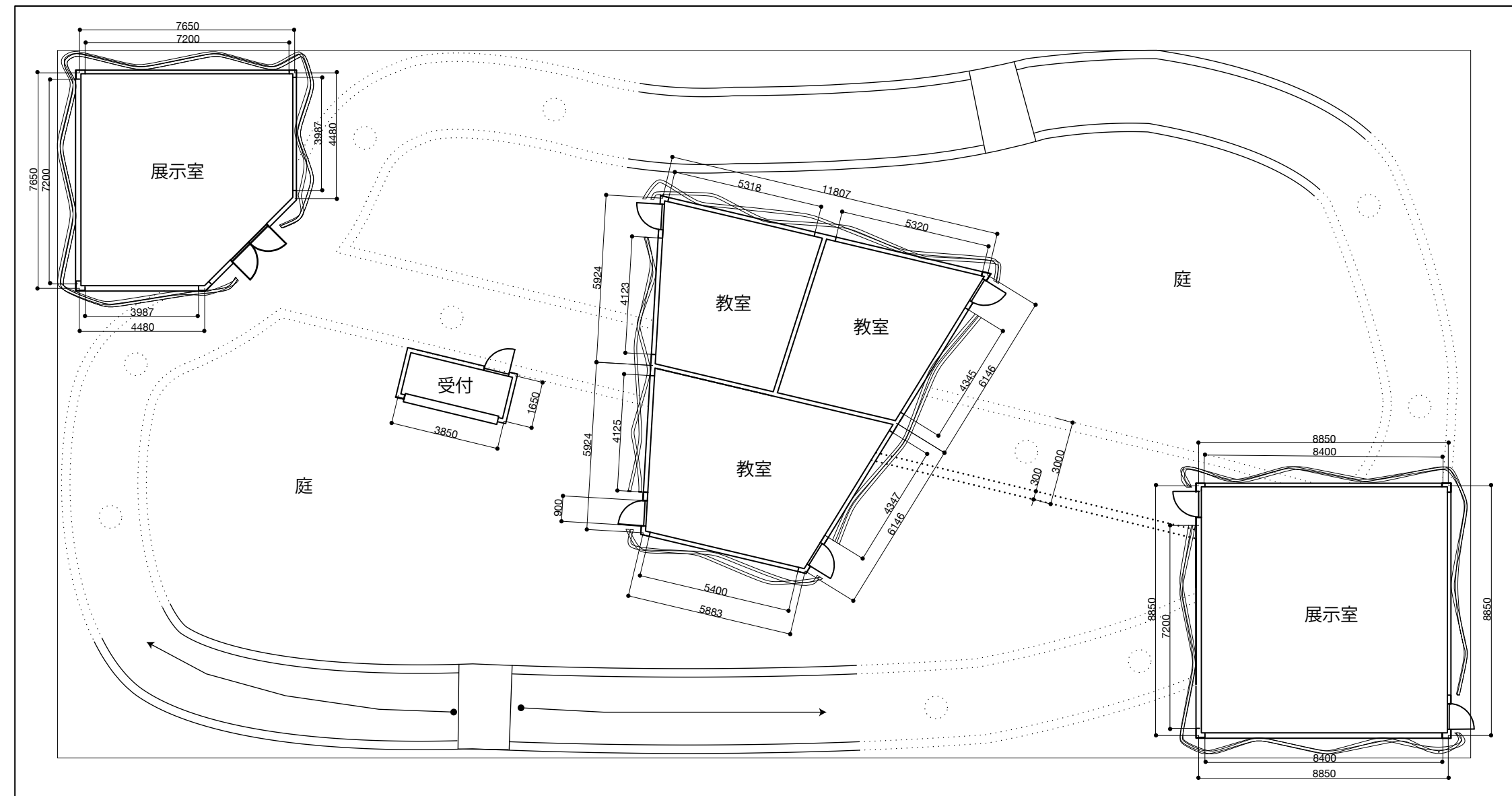


### 建物

敷地内には建物が複数あり、それらを一周することができる回廊が繋いでいる。大通りから見えるよう、あまり建物は置かず、より広い空間を作った。そうすることで、一階部分は自由な空間が生まれ、人々が回廊の柱を上手く使えるようにした。また回廊が高低差がありながらも周遊性を持っていることで、内部の様子を様々な角度から見る事ができる。



2階平面図 縮尺 1/180



1階平面図 縮尺 1/180

### GLの定義

建物などの地面盤の高さを表すGLを建物を作る上でのスタートラインとしてだけでなく、人々の生活の基盤と解釈した。人としてのスタートラインは「好きなことを始める」ことである。よって趣味を発見し深めるカルチャーセンターを設計する。



# 現在のカルチャーセンターの問題点と解決策

カルチャーセンターは各地に設けられているが、その認知度はあまり高くなく、特に若い世代の方は存在自体を知らないことが多い。その理由として、ある大きなビルの一部にあることが多く、近寄りたがい存在になっていることがあげられる。そこでカルチャーセンターを「可視化」することで認知度を上げる。カルチャーセンターに興味がない人でも自然に視界に入り赴きたくするような建築を構想した。

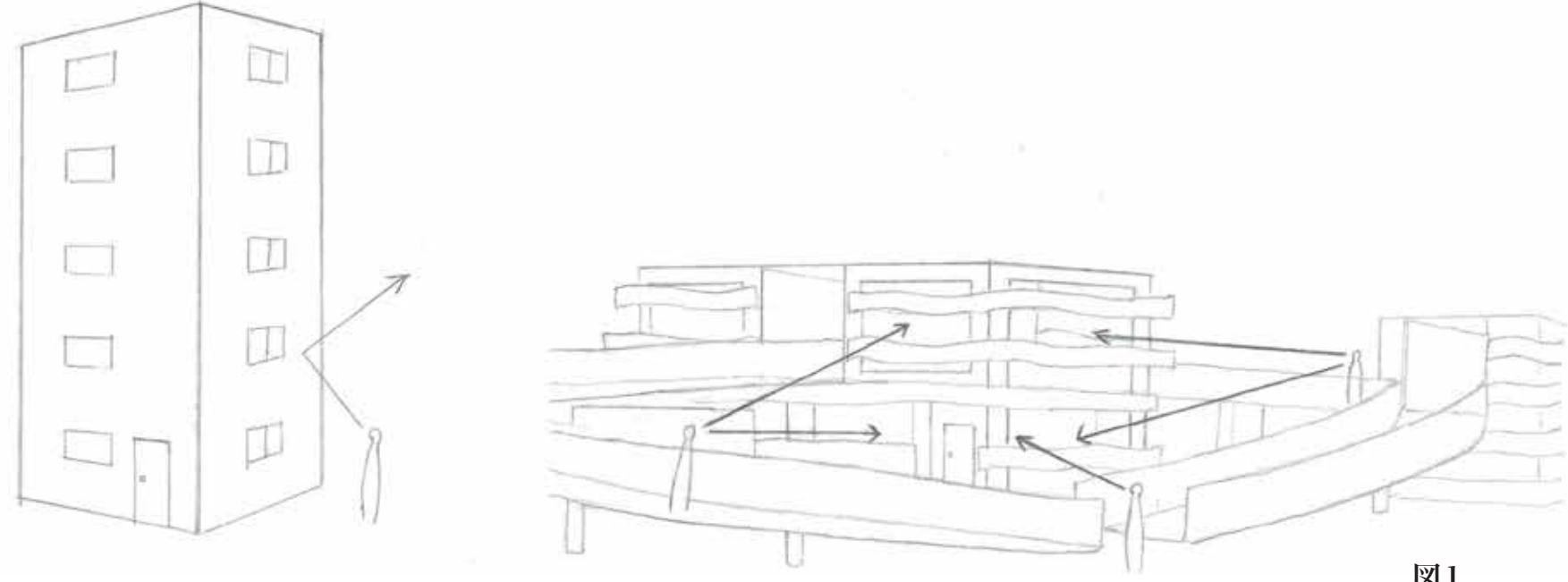
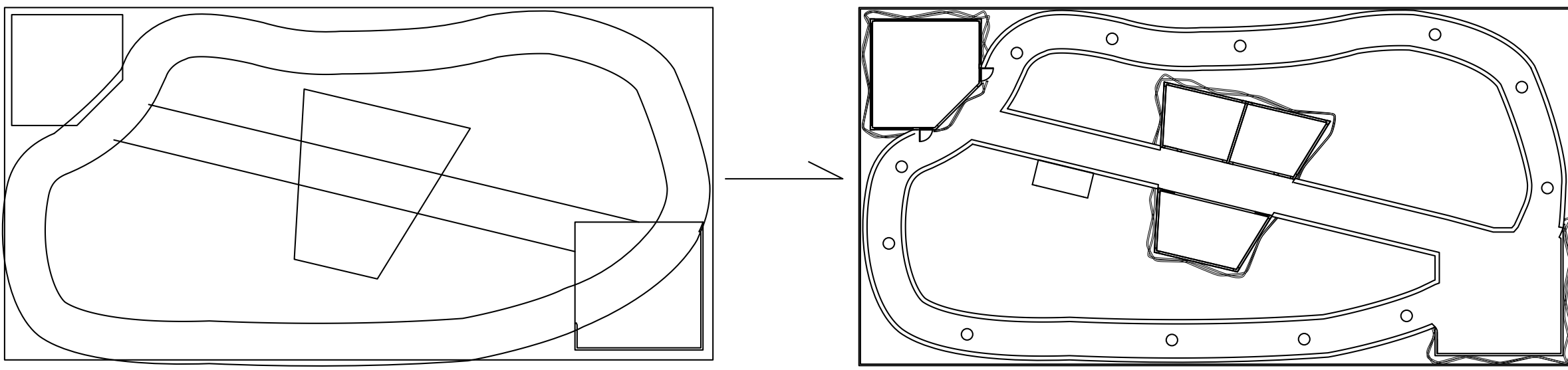
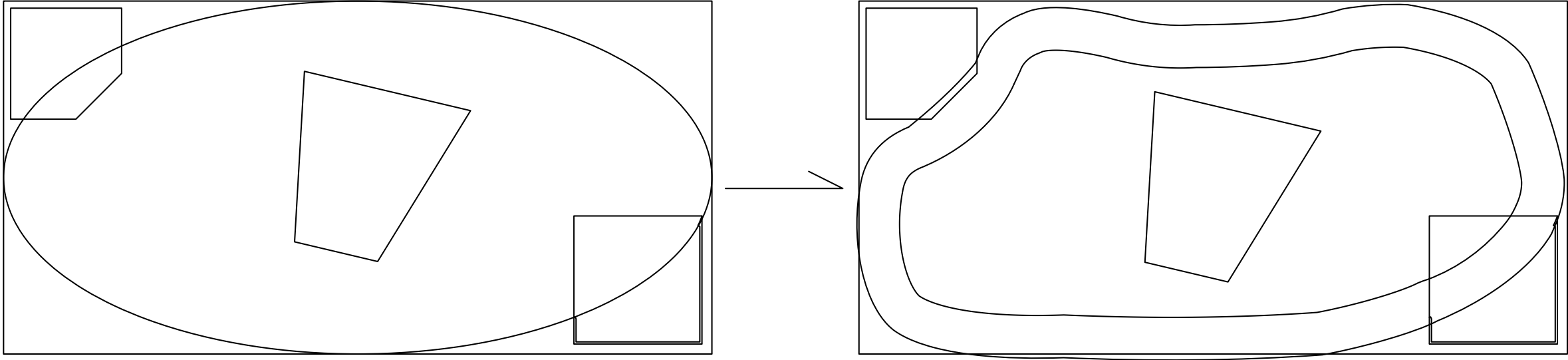
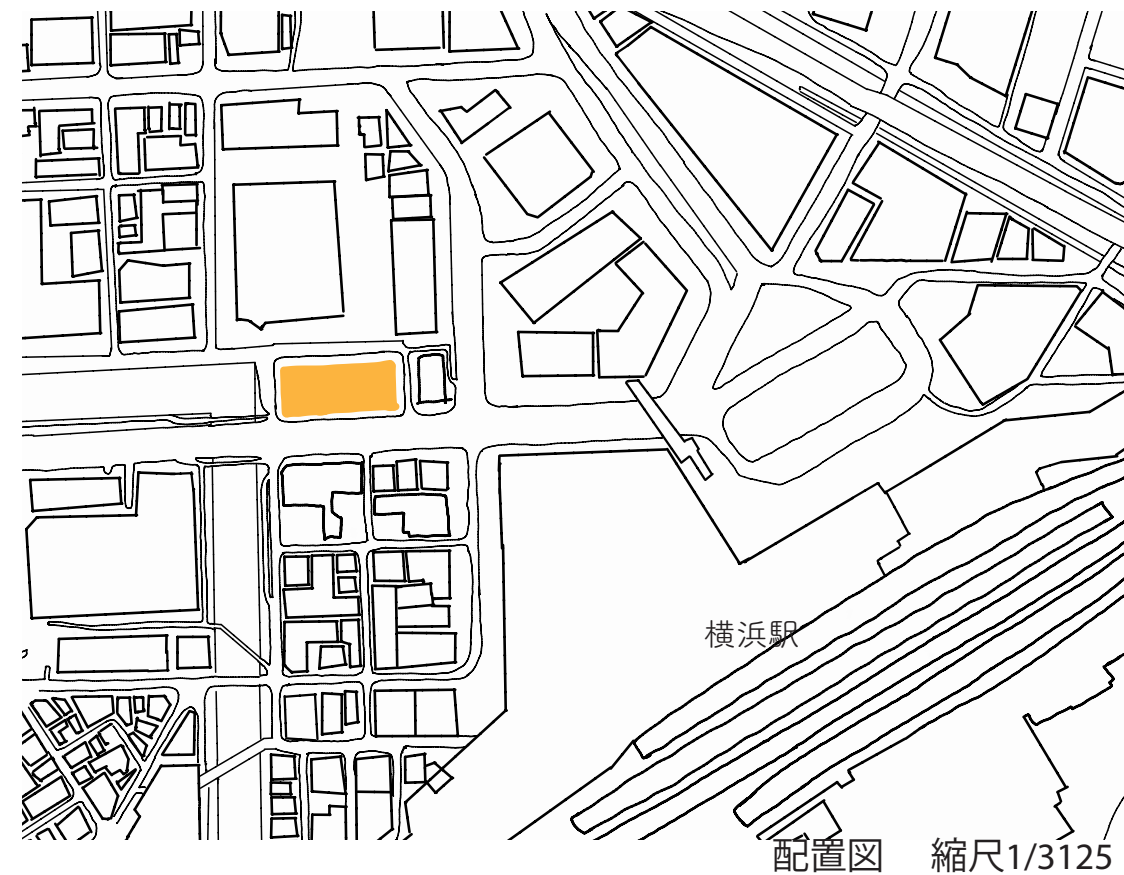


図1

図2

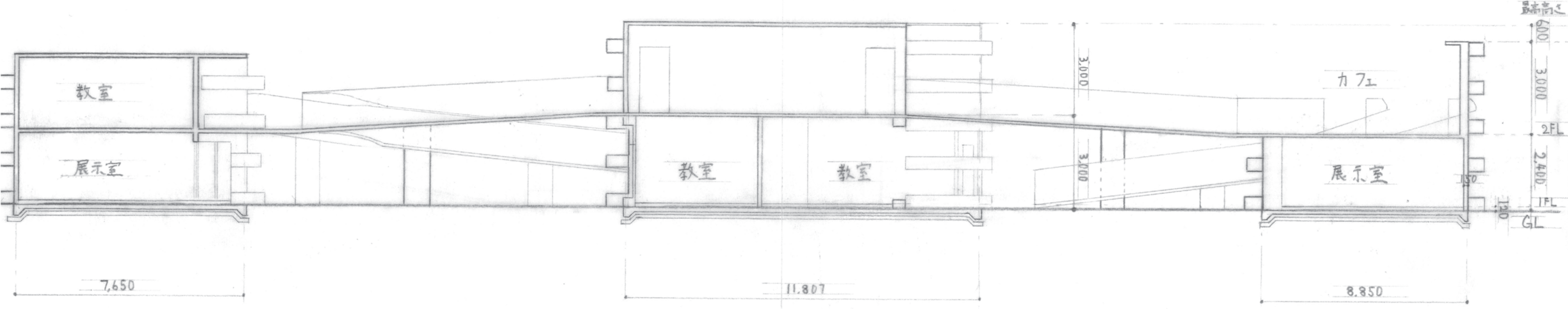


## 敷地

横浜の大通りに面している部分に設計を行う。人通りの多い場所であることで、特に忙しい社会人がカルチャーセンターをふと目にする事ができ、新しい趣味を発見することができるような空間を設計する。また横浜は駅から少し離れると住宅地が広がっている。駅に向かうまでに目に入る場所、そして自分の家から通えるような場所を選択する。

## 内外の境界

この建築の特徴としては敷地中心部にある回廊が建物の中を貫いているところである。その理由としてはカルチャーセンターの閉鎖的な「内」というイメージを改善するため、「外」にある回廊を「内」に入れることで内外との境界線を無くし、より建物内に入りやすいような設計にした。またその他の工夫として、建物の外壁は平面に対し、外側に曲線をデザインした。そうすることによって建物の内部は使いやすい空間が広がり、外部は回廊からの丸みを維持し、内外との境界線を無くした。



断面図 1/120